

令和7年度第2回
小笠原村愛玩動物の適正な飼養及び管理に関する審議会

令和8年3月16日（月）午後2時から午後5時
小笠原村役場本庁会議室B
小笠原村母島支所大会議室
webexによるオンライン会議

<議題>

議題1 ペットの持込み制限の検討について

<配布資料>

- ・ 出席委員名簿
- ・ 資料1 令和7年度第1回審議会の振り返りについて
- ・ 資料2 ホワイトリスト掲載検討種情報整理表（哺乳類）
- ・ 資料3 ホワイトリスト掲載検討種情報整理表（鳥類）
- ・ 資料4 鳥類に関する感染症リスク及び感染症対策について
- ・ 資料5 哺乳類・鳥類のホワイトリスト先行施行について

令和7年度第2回小笠原村愛玩動物の適正な飼養及び管理に関する審議会 出席者名簿

< 委員 >

堀越 和夫 (会長)	特定非営利活動法人小笠原自然文化研究所 理事長	(父島会場)
藤田 道男 (副会長)	環境省関東地方環境事務所小笠原自然保護官事務所 国立公園保護管理企画官	(父島会場)
星野 和真	東京都島しょ保健所小笠原出張所 生活環境推進担当・獣医師	(父島会場)
松林 久美子	社会福祉法人小笠原村社会福祉協議会 職員	(父島会場)
高橋 恒彦	公益社団法人東京都獣医師会 業務執行理事・獣医師	(オンライン)
宮川 空	OPOの会 代表	(父島会場)
有賀 文子	299の会 代表	(母島会場)

< オブザーバー >

小菊 洋行	おがさわら人とペットと野生動物が共存する島づくり協議会 獣医師	(父島会場)
日下部 ゆみ	おがさわら人とペットと野生動物が共存する島づくり協議会 愛玩動物看護師	(父島会場)

< 事務局 >

石原 洋介	小笠原村 環境課長	(父島会場)
安藤 武史	小笠原村環境課自然環境係 係長	(父島会場)
井上 直美	小笠原村環境課自然環境係 主査	(父島会場)
米塚 佐世子	小笠原村環境課自然環境係 主査	(父島会場)

< 事務局支援業務請負業者 >

村尾 未奈	一般社団法人日本森林技術協会事業部森林保全第一グループ	(オンライン)
新井 佑莉那	一般社団法人日本森林技術協会事業部森林保全第一グループ	(オンライン)
山本 英恵	一般社団法人日本森林技術協会事業部保全管理グループ	(オンライン)

令和7年度第1回審議会の振り返り①

- ◆ 令和7年11月18日に開催した第1回審議会では、小笠原村長から「愛玩動物の持込みの制限」に関する諮問を受け、条例第6条に規定する愛玩動物（ペット）の持込み制限の内容及び運用方法に関して検討、審議した。
- ◆ ペットの持込み制限は、「ブラックリスト方式」（禁止リスト）ではなく、「ホワイトリスト方式」（許可リスト）を採用していることを確認。

持ち込んではいけないペットを個別に判断するためには、あらゆる潜在的リスクを想定しなければならず、ブラックリストの規定及び運用は非常に困難であるため、生態系への影響が未知の種も一律に持込みを制限する。

そのうえで、適正飼養の方法が確立されていることや獣医師による指導が可能であることなどにより管理の徹底ができることを条件に「持ち込んでもよいペット」とする。

<ホワイトリスト>

持ち込んでもよいペットについては条文に規定する。
この規定を「ホワイトリスト」と呼ぶ。

現条文で持込みを認めているペット（ホワイトリスト掲載種）は、イヌ・ネコ・登録済みの個体のみ。

令和7年度第1回審議会の振り返り②

- ◆ 第1回審議会では、「哺乳類」と「鳥類」に焦点をあてて検討。
- ◆ 検討対象とする種は、「現在、村内で飼育されている種」、「過去に村内で飼育されていた種」、「過去に飼育意向のあった種」とした。
- ◆ これらの種について、
 - ・社会的ニーズ
 - ・要注意外来種
 - ・原産地以外の野外での定着事例
 - ・生態系への影響リスク
[野外定着・個体群形成リスク、在来動物・在来植物への影響リスク、感染症媒介リスク]
 - ・適正飼養の可能性
[逸出防止、繁殖制限、個体識別、感染症予防などの措置]に着目して情報を整理し、検討を行った。
- ◆ 審議の結果、「現在、村内で飼育されているものについてはより慎重に検討すべき」とし、生態系への影響リスクが低く適正飼養が可能であると考えられるもののほか、現在飼育されている種についてもホワイトリスト掲載検討種として継続して審議することとなった。

哺乳類・鳥類のホワイトリストの検討について

◆ ホワイトリスト掲載検討種は次のとおり。

【哺乳類】

カイウサギ、モルモット、ハムスター、チンチラ、フクロモモンガ

【鳥類】

セキセイインコ、コザクラインコ、ブンチョウ、ニワトリ、ヒメウズラ

事務局では、これらの種に加え、国内における飼養ニーズが高く、かつホワイトリスト掲載検討種に生態等が類似する次の種についても参考として情報を整理した。

【哺乳類】 デグー

【鳥類】 オカメインコ、ボタンインコ類

第2回審議会では、上記の種のホワイトリスト掲載について審議する。

カイウサギ

【分類】哺乳綱兔目(ウサギ目)ウサギ科アナウサギ属

形態・生態情報※1	
分類	現在ペットとして飼育されているウサギはアナウサギ属のアナウサギを家畜化したもの。国内に棲息する野生のウサギはノウサギ属・アマミノクロウサギ属で、野生のアナウサギは存在しない。
原産地	アナウサギの野生種はイベリア半島周囲、アフリカ西部の草原や森林、草木のある丘陵地帯に棲息する。
大きさ	【頭胴長】 38～50cm 【尾長】 4.5～7.5cm 【耳長】 6.5cm～8.5cm 【体重】 1.5kg～3.0kg
行動圏・習性	地面に巣穴を掘り、2～8頭の集団(オス1頭、複数のメスと仔)で生活する。数ヘクタールの行動範囲を持つ。夜行性。
寿命・繁殖	【寿命】 5～7年。飼育下では10年を越す事例もある。 【繁殖】 周年繁殖。性成熟オス7～8か月齢、メス4～12か月齢。 発情周期12～14日。妊娠期間30～32日。産仔数4～10頭。
食性	【草食性】 水分の多い葉を好むが、茎、根、枝、樹皮なども食べる。



(引用)https://www.photo-ac.com/

飼育に関する情報※1	
社会的ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ペットとしてのウサギは愛玩用に改良されたもの。1800年代にオランダなどで改良が進み、現在では小型種から大型種まで150種以上の品種がある。 愛玩用のほか、食肉、毛皮、実験用などに利用される。
特性・飼育方法	<ul style="list-style-type: none"> 単独飼育と複数飼育のどちらでも問題ない。 人に従順な個体が多く飼育者を認識することができる。 番での飼育では容易に繁殖する。 制限された空間ではストレスが生じるため、四肢を伸ばすことができる大きなケージを設けたり、ケージ内で飛び跳ねる行動ができる柵を設置するほか、室内で放し飼いをする時間を設けることが推奨される。 「群れる」「物を齧る」「巣穴に潜る」習性に合わせた環境とする。 適度な飼育温度は16～22度。湿度は30～50%。 ペットショップで販売する場合、一般的に避妊去勢手術は施されていない。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	
飼育環境	

※1 参考図書：カラーアトラス エキゾチックアニマル哺乳類編第3版

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	◆	交尾排卵動物であり繁殖力が非常に高い。世界・日本の侵略的外来種ワースト100に記載されている。国内外において野外における定着事例あり。
在来動物の捕食・競合	◆	草食性のため在来動物の捕食リスクはない。しかし、巣穴をつくることにより植生を改変し土壌流出を起こし海鳥類の営巣に影響を与えたり、海鳥類の巣穴を占拠することにより繁殖妨害する国内事例がある。単体での影響リスクは高くないと考えられる。
在来植物の食害・植生改変	◆	草食性のため食害などの影響を与えるリスクがある。巣穴を掘ることにより植生を改変する事例がある。単体での影響リスクは高くないと考えられる。
感染症媒介	○	ペット化された長い歴史のなかで重大な感染症リスクは確認されていない。人獣共通感染症としてパスツレラ症があり、低頻度だが重症化することもある。※2
適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	○	室内で専用ケージでの飼育が推奨されている。また、個体の健康維持のための放し飼いをする場合でも、室内で放つことが認知されている。
繁殖制限	○	幼体の雌雄鑑別は困難。生後4か月頃から避妊去勢手術が可能。去勢手術は技術的に容易だが、避妊手術はウサギの開腹手術経験のない獣医師にはやや難しく、避妊手術は施術できる医師に限られる。経験のある獣医師であれば施術可能。避妊去勢により、病気のリスクを下げるなど健康面でのメリットもある。
個体識別	○	マイクロチップの装着が可能。
感染症予防	○	長い歴史のなかで、重大な感染症は確認されていない。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
<ul style="list-style-type: none"> 繁殖力が高く、国内外において個体群形成し生態系に被害をもたらしている事例がある。複数頭が逸出した場合の個体群を形成するリスクは非常に高く、個体群を形成した場合、在来植物の食害や植生改変、海鳥類の生息環境悪化などが想定され生態系への影響リスクも高い。 逸出防止と繁殖制限を徹底し個体群形成の可能性をなくすことにより、生態系への影響リスクは低減することができる。 室内におけるケージでの飼育が一般的であり、室内で放つ場合は注意を徹底することで逸出防止が可能である。 複数頭飼育を可能とするのであれば、飼育頭数を制限するほか、雌雄どちらかのみ飼育(幼体の雌雄鑑別が困難であることに注意)とすることや去勢を義務付けることが必要である。 マイクロチップを装着することは、個体管理を可能とするほか、飼い主の責任感を高め遺棄を抑制するなど適正飼養を推進するものとして一定の意義がある。カイウサギは生態系への影響リスクが高いため、マイクロチップの装着を義務付けることが必要である。 	
ホワイトリスト掲載可能性	生態系への影響リスクが高く飼育にあたって特に注意が必要な種である。繁殖制限措置と個体識別措置を条件としたうえで、ホワイトリスト掲載にあたっては慎重な判断が求められる。

※2 参考文献：Hill, W. A., & Brown, J. P. (2011). Zoonoses of rabbits and rodents. Veterinary Clinics of North America: Exotic Animal Practice, 14(3), 519-531.

モルモット

【分類】 哺乳綱ヤマアラシ亜目テンジクネズミ上科テンジクネズミ属

形態・生態情報※1	
分類	古代インディオが野生のテンジクネズミ等を家畜化したものが祖先といわれ、野生には存在しない。
原産地	テンジクネズミの野生種はペルー南部、ボリビア南部、アルゼンチン北部、チリ北部の草原、森林、岩場に棲息する。
大きさ	【頭胴長】 20～40cm。尻尾を欠く。 【体重】 0.5～1.5kg。一般的にオスのほうが大きい。
行動圏・習性	夜行性。5～10頭の群居性。
寿命・繁殖	【寿命】 6～7年。 【繁殖】 周年繁殖。性成熟オス約70日齢、メス30～45日齢。 妊娠期間63～72日。発情周期15～17日。産仔数1～7頭。
食性	【草食性】 牧草、野菜。体内でビタミンCの合成ができないため、食餌で補給する。



(引用)https://www.photo-ac.com/

飼育に関する情報※1	
社会的ニーズ	・ 飼育が容易であることから実験動物やペットとして世界中に広まった。
特性・飼育方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単独飼育と複数飼育のどちらでも問題ない。群居性を持つため、多くの飼育書では複数飼育が勧められている。 ・ 跳躍力が乏しいため、蓋のない水槽タイプ等のケージで飼育することができる。立ち上がったときに肩の高さより高い壁を乗り越えることはできない。 ・ 身体を隠すための小屋を設置するなど、「群れる」「隠れる」習性に合わせた環境とする。 ・ 適度な飼育温度は18～22度あるいは20～24度。湿度は50～60%。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	
飼育環境	

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	○	動きが遅く野外定着の可能性は低いが、捕食者不在のため可能性はゼロではない。家畜化された種であり、野生化は困難と考えられる。原産地以外の野外における定着事例は確認されていない。
在来動物の捕食・競合	○	草食性のため在来動物の捕食や餌資源等を競合するリスクはないと考えられる。
在来植物の食害・植生改変	△	草食性のため、食害や植生に影響を与える可能性はある。
感染症媒介	○	ペット化された長い歴史の中で重大な感染症リスクは確認されていない。頻度は高くないが、ペットのモルモットから人に感染し重篤化する病気として、リンパ球性脈絡髄膜炎(LCMV)等が知られている。※2

適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	○	室内でケージでの飼育が推奨されている。一定の高さ(30cm)があれば逸出できない。
繁殖制限	△	幼体の雌雄鑑別は困難であり、3～4か月で判別可能となる。去勢手術は可能だが一般的ではなく、施術できる医師に限られる。避妊手術は困難。一般的に不妊化は選択的処理として行われない。
個体識別	○	マイクロチップの装着が可能。柄のある個体であれば個体判別は可能だが、単色の個体で困難。
感染症予防	○	長い歴史のなかで、重大な感染症は確認されていない。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
<ul style="list-style-type: none"> □ 国内外において原産地以外での定着事例はなく、野外定着・個体群形成のリスクは低く、生態系に与える影響も低い。 □ 室内においてケージ等で飼育されることが一般的であり、逸出防止が可能である。30cm程度の高さがあるケース等で逸出を防げるなど、逸出防止は比較的容易である。 □ 複数頭飼育を可能とするのであれば、飼育頭数を制限するほか、雌雄どちらかのみ飼育(幼体の雌雄鑑別が困難であることに注意)とすることや去勢を義務付けることが必要である。 □ マイクロチップを装着することは、個体管理を可能とするほか、飼主の責任感を高め遺棄を抑止するなど適正飼養を推進するものとして一定の意義がある。 	
ホワイトリスト掲載可能性	生態系への影響リスクが低いことと逸出防止が可能であることから、繁殖防止措置と個体識別措置を条件とすることにより、ホワイトリストに掲載できる種であると考えられる。

※2 参考文献: Amman, B. R., Pavlin, B. I., Albariño, C. G., Comer, J. A., Erickson, B. R., Oliver, J. B., ... & Ksiazek, T. G. (2007). Pet rodents and fatal lymphocytic choriomeningitis in transplant patients. Emerging infectious diseases, 13(5), 719.

ハムスター

【分類】哺乳綱齧歯目ネズミ上科キヌゲネズミ科キヌゲネズミ亜科

形態・生態情報※1	
分類	ハムスターはキヌゲネズミ亜科に属する齧歯類の総称。
原産地	ヨーロッパからアジアの乾燥、半乾燥地帯に棲息する。 (ゴールデン)シリア、レバノン、イスラエル。
大きさ	(ゴールデン) 【頭胴長】16~18.5cm 【尾長】2.1~2.85cm 【体重】130~210g。 一般的にオスのほうが大きい。
行動圏・習性	温度が一定に保たれる地下に巣をつくる。活動量が豊富で、1日に7~13時間歩行し、移動距離は11.5km~21.1kmに及ぶ。 5~10頭の群居性(ゴールデン)。夜行性。
寿命・繁殖	(ゴールデン) 【寿命】2~2.5年。 【繁殖】周年繁殖。性成熟45~60日齢。妊娠期間約16日。 発情周期4~5日。産仔数6頭。
食性	【雑食性】草食性に近い。植物の葉、茎、根、実や種子のほか昆虫なども食べる。



(引用)https://www.photo-ac.com/

飼育に関する情報※1	
社会的ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> 飼育や繁殖が容易であることからペット以外にも実験動物として知られる。 ゴールデン、ジャンガリアン、キャンベル、ロボロフスキー、チャイニーズ、クロハラといった種が流通している。
特性・飼育方法	<ul style="list-style-type: none"> ゴールデンは単独飼育を推奨。その他の種は複数飼育でも問題ない。 ケージの中に床敷、小屋などを設置し、ハムスターの三大習性「巣に潜る」「物を齧る」「餌を巣に蓄える」にあわせた環境とする。 回し車を好むため必ず設置する。 適度な飼育温度は20~26度、湿度は40~60%(ゴールデン)。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	
飼育環境	

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	○	動きが遅く野外定着の可能性は低いが、捕食者不在のため可能性はゼロではない。原産地以外の野外における定着事例は確認されていない。
在来動物の捕食・競合	△	雑食性のため在来動物を捕食する可能性はある。
在来植物の食害・植生改変	△	雑食性のため、食害等の可能性はある。
感染症媒介	○	ペット化された長い歴史のなかで重大な感染症リスクは確認されていない。人獣共通感染症として、内部寄生虫である小形糸虫があげられるほか、頻度は高くないがペットのハムスターから人に感染し重篤化する病気として、リンパ球性脈絡髄膜炎(LCMV)等が知られている。※2
適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	○	室内でケージでの飼育が推奨されている。
繁殖制限	△	幼体の雌雄鑑別は困難。避妊去勢手術は一般的ではなく、施術できる医師に限られる。不妊化は選択的処理として行われず。単独飼育の徹底が最も有効な繁殖制限方法となる。
個体識別	△	ゴールデン種は比較的大型の種でありマイクロチップの装着が可能。その他の小型種は装着が困難または不可能。
感染症予防	○	長い歴史のなかで、重大な感染症は確認されていない。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
国内外において原産地以外での定着事例はなく、野外定着・個体群形成のリスクは低く、生態系に与える影響も低い。	□
室内においてケージで飼育することが一般的であり、逸出防止は可能である。	□
避妊去勢手術が困難であるため、繁殖制限の有効な手段は、飼育頭数を1頭に制限することである。複数頭飼育を可能とするのであれば、頭数制限が必要である。また、雌雄鑑別されている場合は雌雄どちらかみの飼育とする、鑑別されていないのであれば別ケージで飼育し同室に放出しないことを徹底することなどにより繁殖を制限する必要がある。	□
マイクロチップを装着することは、個体管理を可能とするほか、飼い主の責任感を高め遺棄を抑止するなど適正飼養を推進するものとして一定の意義がある。ただし、ゴールデン以外の小型種へのマイクロチップ装着は困難または不可能。	□
ホワイトリスト掲載可能性	生態系への影響リスクが低いことと逸出防止が可能であることから、繁殖防止措置と個体識別措置を条件とすることにより、ホワイトリストに掲載できる種であると考えられる。

※2 参考文献: Amman, B. R., Pavlin, B. I., Albariño, C. G., Comer, J. A., Erickson, B. R., Oliver, J. B., ... & Ksiazek, T. G. (2007). Pet rodents and fatal lymphocytic choriomeningitis in transplant patients. Emerging infectious diseases, 13(5), 719.

チンチラ

【分類】 哺乳綱齧歯目ヤマアラシ亜目テンジクネズミ型類チンチラ科チンチラ属

形態・生態情報※1	
分類	野生種は乱獲のために絶滅の危機に陥った歴史があり、ワシントン条約では付属書 I に記載されている。
原産地	野生種は南米アンデスの固有種。チリ北部の標高4500mの寒冷(-15~-20度)な乾燥地帯の岩場に棲息する。
大きさ	【頭胴長】 25.4~35.6cm 【尾長】 15.2~20.3cm 【体重】 400~600g
行動圏・習性	夜行性だが日中活動も行う。12~100頭の集団を作る群居性。
寿命・繁殖	【寿命】 10年。飼育下では17年以上の報告もある。齧歯類では珍しく長寿。 【繁殖】 季節繁殖。飼育下では周年繁殖。性成熟オス8.5か月齢、メス8か月齢。妊娠期間105~108日。性周期30~50日。産仔数1~5頭。
食性	【草食性】 草の葉、茎、根、樹皮、サボテン、コケ



(引用) <https://www.photo-ac.com/>

飼育に関する情報※1	
社会的ニーズ	・最高級の毛皮用の動物として有名。食肉にも利用される。
特性・飼育方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単独飼育と複数飼育のどちらでも問題ない。意思表示が明確である。 ・ 跳躍力が優れているため、十分な運動量を確保できる大きく、高さがあり高層のケージを設けることが理想である。狭いケージで飼育する場合は、ケージから出して運動させる時間を多く取る。 ・ 「物を齧る」「砂浴びをする」習性に合わせた環境とする。 ・ 適度な飼育温度は10~20度、湿度を50%以下に設定すれば18.3~26.7度に適応できる。32.2度以上では死亡する。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	
飼育環境	


生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	○	原産地以外の野外における定着事例は確認されていない。寒冷な乾燥地帯に棲息する種であり小笠原諸島での野外定着は困難と考えられるが、過少評価すべきではない。
在来動物の捕食・競合	○	草食性のため在来動物の捕食や餌資源等を競合するリスクはないと考えられる。
在来植物の食害・植生改変	△	草食性のため、食害や植生に影響を与える可能性はある。
感染症媒介	○	重大な感染症リスクは確認されていない。人獣共通感染症として小形糸虫が知られている。

適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	○	室内で専用ケージでの飼育が推奨されている。
繁殖制限	△	幼体の雌雄鑑別は困難である。去勢手術は可能だが一般的ではなく、施術できる医師に限られる。避妊手術は困難。一般的に不妊化は選択的処理として行われない。
個体識別	○	マイクロチップの装着が可能。単色の個体が多く、色や柄での判別は困難。
感染症予防	○	重大な感染症は確認されていない。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
<ul style="list-style-type: none"> □ 国内外において原産地以外での定着事例はなく、野外定着・個体群形成のリスクは低く、生態系に与える影響も低い。 □ 室内においてケージで飼育することが一般的であり、逸出防止は可能である。 □ 複数頭飼育を可能とするのであれば、飼育頭数を制限するほか、雌雄どちらかのみ飼育(幼体の雌雄鑑別が困難であることに注意)とすることや去勢を義務付けることが必要である。 □ マイクロチップを装着することは、個体管理を可能とするほか、飼い主の責任感を高め遺棄を抑制するなど適正飼養を推進するものとして一定の意義がある。 	
ホワイトリスト掲載可能性	生態系への影響リスクが低いことと逸出防止が可能であることから、繁殖制限措置と個体識別措置を条件とすることにより、ホワイトリストに掲載できる種であると考えられる。

フクロモモンガ

【分類】哺乳綱双前歯目フクロモモンガ科フクロモモンガ属

形態・生態情報※1		
分類	有袋類。モモンガやムササビなどの齧歯類とは別系統。	 <p>(引用) https://www.photo-ac.com/</p>
原産地	タスマニア島、オーストラリア大陸の北部と東部、ニューブリテン島、ニューギニア島とその周囲の島々の熱帯雨林に棲息している。	
大きさ	【頭胴長】18～23cm 【尾長】20～30cm 【体重】オス115～160g、メス95～135g	
行動圏・習性	木々を滑空しながら移動し地面に降り立つことはまれ。滑空は50mに及ぶ。樹洞を巣穴として生活する。6～7頭以下(オス1頭、複数のメスと仔)の群居性。夜行性。	
寿命・繁殖	【寿命】5～7年。飼育下では12～15年の報告もある。 【繁殖】季節繁殖。飼育下では周年繁殖も可能で年2回繁殖。性成熟オス8～12か月齢、メス12～14か月齢。多発情。妊娠期間約16日。産仔数1～2頭(通常2頭)。	
食性	【雑食性】樹液(アカシア・ユーカリ)・果汁・花粉・花蜜・昆虫 基本は果実、花、花粉がメインであり、昆虫はたまに食べる程度。	

飼育に関する情報※1	
社会的ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> 1980年内からアメリカでも飼育され始め、国内では2000年以降に人気が出てきてペットとして大量に流通している。
特性・飼育方法	<ul style="list-style-type: none"> 番や複数での飼育が理想とされる。単独飼育の際は人との接触をもった関係を保つことが推奨される。 番で飼育すると繁殖は容易。 活発な動物で大きく、高さのあるケージを設けることが理想である。ケージ内には、木・踊り場・餌容器・給水器・身体を隠すことができる小屋か袋を設置する。 「群れる」「夜行性」「十分な運動と滑空」という習性にあわせた環境とする。 適度な飼育温度は24～27度。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	
飼育環境	

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	○	繁殖力は高くないが、番で飼育すると繁殖は容易である。原産地以外の野外における定着事例は確認されていない。
在来動物の捕食・競合	△	雑食性のため在来動物を捕食する可能性はある。夜行性のため、グリーンアノールによる食害を逃れた夜行性昆虫を食害する可能性があるが、昆虫専食ではないのでリスクは低い。
在来植物の食害・植生改変	△	雑食性であり、花粉、花蜜、樹液を採餌するため食害や植生への影響が考えられる。
感染症媒介	○	重大な感染症リスクは確認されていない。

適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	○	室内で専用ケージでの飼育が推奨されている。個体の健康維持のための散歩の方法として室内において蚊帳などを使用することが認知されている。
繁殖制限	△	去勢手術は可能だが一般的ではなく、施術できる医師が限られる。避妊手術は困難。一般的に不妊化は選択的処置として行われず、去勢とマイクロチップ装着をセットで販売されることもある。
個体識別	○	マイクロチップの装着が可能。
感染症予防	○	重大な感染症は確認されていない。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
<ul style="list-style-type: none"> □ 国内外において原産地以外での定着事例はなく、野外定着・個体群形成のリスクは低く、生態系に与える影響もそれほど高くはない。 □ 室内においてケージで飼育されることが一般的であり、逸出防止が可能である。 □ 複数頭飼育を可能とするのであれば、飼育頭数を制限するほか、雌雄どちらかのみでの飼育とすることや去勢を義務付けることが必要である。 □ マイクロチップを装着することは、個体管理を可能とするほか、飼い主の責任感を高め遺棄を抑制するなど適正飼養を推進するものとして一定の意義がある。 	
ホワイトリスト掲載可能性	生態系への影響リスクが低いことと逸出防止が可能であることから、繁殖制限措置と個体識別措置を条件とすることにより、ホワイトリストに掲載できる種であると考えられる。

デグー

*飼育実績なし・参考資料として作成

【分類】哺乳綱齧歯目ヤマアラシ亜目テンジクネズミ型類デグー科デグー属

形態・生態情報※1	
分類	デグー属はデグー、チリデグー、ペルーデグー、モカデグーなどが知られている。ペットとして流通するデグーにはデグー属ではないフサオデグーが含まれる。
原産地	チリのアンデス山脈。亜熱帯気候の半砂漠地帯、標高1200~3500mのサバンナの岩場や断崖に棲息する。
大きさ	【頭胴長】12~20cm 【尾長】6.5~13cm 【体重】170~350g
行動圏・習性	一般的に昼行性だが環境変化に対応し概日リズムを変化させる。1~2頭のオスと2~5頭にメスで集団を作る群居性。
寿命・繁殖	【寿命】飼育下では7~9年。 【繁殖】季節繁殖。飼育下では周年繁殖。性成熟53~55週齢。妊娠期間86~93日。発情周期約3週間。産仔数6(3~10頭)。
食性	【草食性】草の葉、茎、根



(引用)https://www.photo-ac.com/

飼育に関する情報※1	
社会的ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ペットとして流通するデグーの多くはフサオデグーが占める。あるいはデグー属との交雑種が多いといわれるが詳細は不明。外見での判断は困難。 海外では昔からペットとして飼育されていたが、国内では近年人気が上昇しペットとしての歴史が浅い。 ハムスターやリスより人によく慣れて、様々な声をだしたり、「歌う」ことでも有名。
特性・飼育方法	<ul style="list-style-type: none"> 2~3歳児と同じくらいの知能があると考えられており、齧歯類で唯一道具を使うことができる。 単独飼育と複数飼育のどちらでも問題ない。社会的なコミュニケーションをとるため複数飼育は推奨されている。同性で2~4頭一緒に飼育することがよいとされる。 活発に動き回るため、十分な広さと高さがあるケージが必要。脚力があるので、上下に活動できる空間をつくる。 「群れる」「物を齧る」「物を認識する」習性にあわせた環境とする。 適度な飼育温度は24~32度、湿度は30~60%が理想。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	<ul style="list-style-type: none"> 0頭。 登録抹消など過去の飼育実績なし。
飼育環境	

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	○	原産地以外の野外における定着事例は確認されていない。
在来動物の捕食・競合	○	草食性のため在来動物の捕食や餌資源等を競合するリスクはないと考えられる。
在来植物の食害・植生改変	△	草食性のため、食害や植生に影響を与える可能性はある。
感染症媒介	○	重大な感染症リスクは確認されていない。人獣共通感染症として、皮膚糸状菌症が知られている。

適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	○	室内で専用ケージでの飼育が推奨されている。
繁殖制限	△	去勢は可能だが一般的ではなく、施術できる医師に限られる。避妊手術は困難。不妊化は選択的処理として行われない。
個体識別	○	マイクロチップの装着が可能。
感染症予防	○	重大な感染症は確認されていない。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
<ul style="list-style-type: none"> □ 国内外において原産地以外での定着事例はなく、野外定着・個体群形成のリスクは低く、生態系に与える影響も低い。 □ 運動能力と知能が高いため逸出するリスクは低くはないと考えられるが、室内においてケージで飼育することが一般的であり、注意を徹底することにより逸出防止は可能である。 □ 複数頭飼育を可能とするのであれば、飼育頭数を制限するほか、雌雄どちらかのみ飼育とすることや去勢を義務付けることが必要である。 □ マイクロチップを装着することは、個体管理を可能とするほか、飼い主の責任感を高め遺棄を抑止するなど適正飼養を推進するものとして一定の意義がある。 	
ホワイトリスト掲載可能性	生態系への影響リスクが低いことと逸出防止が可能であることから、繁殖防止措置と個体識別措置を条件とすることにより、ホワイトリストに掲載できる種と考えられる。ただし、これまで村内で飼育された実績がないことから慎重な判断が求められる。

※参考文献2 :Tanabe, H., Abe, N., & Anzawa, K. (2023). A Case of Tinea Corporis Caused by Trichophyton benhamiae var. luteum from a Degu and Evolution of the Pathogen's Taxonomy. Journal of Fungi, 9(11), 1122.

セキセイインコ

【分類】 鳥綱インコ目インコ科セキセイインコ属

形態・生態情報※1	
原産地	オーストラリア内陸地域の乾燥地帯の低木、開けた森林、草原に棲息している。巣は樹洞を使用している。
大きさ	【体長】 18cm 【体重】 30~40g
行動圏・習性	大小様々な群れをつくる。
寿命・繁殖	【寿命】 8~10年。なお、10年以上生きる長寿の個体もみられる。 【繁殖】 発情期間：周年。性成熟：6~7か月。繁殖回数：3~4回。 産卵数：1日おきに5~7個。巣立ち：28~32日
食性	【穀食性】 植物の種子
飼育に関する情報※1	
社会的ニーズ	・日本で飼われている鳥類の7~9割はセキセイインコ・オカメインコ・ブンチョウ・コザクラインコ。 ・飼育も繁殖も容易で、手乗りにしやすいため人気が高い。人の言葉をまねてしゃべったり歌ったりする。
特性・飼育方法	・ケージの最小限の大きさは奥行き46×幅46×高さ61cm。 ・普段はケージ内で飼育しながら、部屋の中で自由に放鳥する方法が推奨されている。 ・適度な飼育温度は25~30度。最低20度以上。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	
飼育環境	



(引用)https://www.photo-ac.com/

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	○	東京や山梨、福岡など国内で一時的な野外繁殖集団を築いた記録があるが、砂漠種であり、父島・母島では定着リスクは低いと考えられる。一般的に鳥類は大量逸出しなければ個体群形成リスクが低い。
在来動物の捕食・競合	○	穀食性のため在来動物を捕食する可能性は低い。
在来植物の食害・植生改変	△	イネ科草本を餌としているため穀物食害や植生改変のリスクがある。
感染症媒介	○	インコ目に多いウイルス性疾患は種特異性が強く野鳥への伝播リスクが低い。保有可能性は低いが、鳥マラリア、鳥ポックス、サルモネラ・ティフィムリウムは注意が必要。 一般細菌類は環境からの感染であり、飼育鳥が感染源とならない。人獣共通感染症として、オウム病があり、まれに重症化する。※2

適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	△	二重扉構造での飼育を必須にすると効果が高い。クリッピングは換羽で復活するため定期的な処置が必要であり、また、運動不足による健康被害や事故のリスクがあり動物福祉面に課題がある。鳥類は逸出リスクが高いうえにリスクを下げるのが難しい。
繁殖制限	△	小型の鳥類の不妊手術は可能ではあるが高リスク。雌雄鑑別が難しく、DNA検査による結果も100%ではないため、繁殖制限をするためには1羽飼いか、各個体を別ケージで飼育することが望ましい。偽卵への差し替えに繁殖抑制の効果はなく、産卵した卵を処分することで個体数を制御することはできるが課題が残る。
個体識別	◆	模様での個体識別は不可能。足環は健康被害のリスクあり。現状、安全な方法はない。
感染症予防	△	島内に持ち込む前に検査を受けることにより予防が可能。ただし、ウイルス等を保有しているリスクをゼロにはできない。 鳥類の感染症リスク及び感染症予防対策は別資料のとおり。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
□ 大量逸出しなければ野外定着・個体群形成のリスクは低く、また個体群を形成しなければ生態系への影響リスクも低い。	
□ 室内におけるケージ飼育が基本となるが、逸出リスクは高い。逸出防止には二重扉構造の設置が有効だが、設置の可否は住宅環境に左右される。逸出防止には、飼い主が逸出防止を強く意識し徹底することが必要。	
□ 避妊去勢手術が困難であるため、繁殖制限の有効手段は、飼育頭数を1羽に制限することである。複数頭飼育を可能とするのであれば、頭数制限が必要である。また、雌雄が鑑別されている場合は雌雄どちらかのみを飼育とする、鑑別されていないのであれば別ケージで飼育し同室に放出しないことを徹底することなどにより繁殖を制限する必要がある。	
□ 感染症予防措置として、島に持ち込む前に感染症検査を実施する必要がある。検査ではウイルス等を保有しているリスクをゼロにはできないが、感染症媒介リスクを下げるができる。ただし、インコ目であることから小笠原の在来鳥類に感染症を伝播するリスクが低いことと、事前の感染症検査の時間や費用などをふまえた実行可能性とのバランスを考慮した制度設計が必要である。	
ホワイトリスト掲載可能性	生態系への影響リスクが低いことと逸出防止が可能であることから、感染症の事前検査、逸出防止の徹底、頭数制限などを実施することを条件に、ホワイトリストに掲載できる種であると考えられる。

※1参考図書：カラーアトラス エキゾチックアニマル鳥類編 第2版
 なお、本図書の情報については、鳥類の専門家(小嶋獣医師)から情報が古い又は適切ではない表記があるとの指摘を受けている。
 ※2参考文献：国立健康危機管理研究機構 感染症情報提供サイト「オウム病」
<https://id-info.jihns.go.jp/infectious-diseases/psittacosis/detail/index.html>

コザクラインコ

【分類】鳥綱インコ目インコ科ボタンインコ属

形態・生態情報※1	
分類	ボタンインコ属であるが固有の特徴を持つ。
原産地	アフリカ南西部のナミビア共和国の西部～アンゴラ共和国の南西部の森林、半砂漠及び山岳地方の半乾燥地帯に棲息する。
大きさ	【体長】 17～18cm 【体重】 42～55g
行動圏・習性	数十羽の群れをつくる。
寿命・繁殖	【寿命】 10～12年 【繁殖】発情期間：周年。性成熟：6～12か月。繁殖回数：3～4回。 産卵数：1日おきに4～6個。巣立ち：35～40日。
食性	【穀食性】 植物の種子。果実も食べる。
飼育に関する情報※1	
社会的ニーズ	・日本で飼われている鳥類の7～9割はセキセイインコ・オカメインコ・ブンチョウ・コザクラインコ。
特性・飼育方法	・陽気な性格だが、神経質で性格がきつい。手乗りとして育てないと慣れない。ボタンインコ属は攻撃性が強いので他種鳥類との同居は避ける。 ・普段はケージ内で飼育しながら、部屋の中で自由に放鳥する方法が推奨されている。 ・適度な飼育温度は25～30度。最低20度以上。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	
飼育環境	



(引用)https://www.photo-ac.com/

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	○	砂漠種であり、父島・母島では野外定着リスクは低いと考えられる。原産地以外の野外における定着事例は確認されていない。一般的に鳥類は大量逸出しなければ野外定着リスクが低い。
在来動物の捕食・競合	○	穀食性のため在来動物を捕食するリスクは低い。
在来植物の食害・植生改変	△	穀物食のため植生改変のリスクはある。
感染症媒介	○	インコ目に多いウィルス性疾患は種特異性が強く野鳥への伝播リスクが低い。保有可能性は低い。鳥マラリア、鳥ポックス、サルモネラ・ティフィムリウムは注意が必要。 一般細菌類は環境からの感染であり、飼育鳥が感染源とならない。人獣共通感染症として、オウム病があり、まれに重症化する。※2

適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	△	二重扉構造での飼育を必須にすると効果が高い。クリッピングは換羽で復活するため定期的な処置が必要であり、また、運動不足による健康被害や事故のリスクがあり動物福祉面に課題がある。鳥類は逸出リスクが高いうえにリスクを下げるのが難しい。
繁殖制限	△	小型の鳥類の不妊手術は可能ではあるが高リスク。雌雄鑑別が難しく、DNA検査による結果も100%ではないため、繁殖制限をするためには1羽飼いか、各個体を別ケージで飼育することが望ましい。偽卵への差し替えに繁殖抑制の効果はなく、産卵した卵を処分することで個体数を制御することはできるが課題が残る。
個体識別	◆	模様での個体識別は不可能。足環は健康被害のリスクあり。現状、安全な方法はない。
感染症予防	△	島内に持ち込む前に検査を受けることにより予防が可能。ただし、ウィルス等を保有しているリスクをゼロにはできない。 鳥類の感染症リスク及び感染症予防対策は別資料のとおり。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
□ 大量逸出しなければ野外定着・個体群形成のリスクは低く、また、個体群を形成しなければ生態系への影響リスクも低い。	
□ 室内におけるケージ飼育が基本となるが、逸出リスクは高い。逸出防止には二重扉構造の設置が有効だが、設置の可否は住宅環境に左右される。逸出防止には、飼い主が逸出防止を強く意識し徹底することが必要。	
□ 避妊去勢手術が困難であるため、繁殖制限の有効手段は、飼育頭数を1羽に制限することである。複数頭飼育を可能とするのであれば、頭数制限が必要である。また、雌雄が鑑別されている場合は雌雄どちらかみのみの飼育とする、鑑別されていないのであれば別ケージで飼育し同室に放ししないことを徹底することなどにより繁殖を制限する必要がある。	
□ 感染症予防措置として、島に持ち込む前に感染症検査を実施する必要がある。検査ではウィルス等を保有しているリスクをゼロにはできないが、感染症媒介リスクを下げるができる。ただし、インコ目であることから小笠原の在来鳥類に感染症を伝播するリスクが低いことと、事前の感染症検査の時間や費用などをふまえた実行可能性とのバランスを考慮した制度設計が必要である。	
ホワイトリスト掲載可能性	生態系への影響リスクが低いことと逸出防止が可能であることから、感染症の事前検査、逸出防止の徹底、頭数制限などを実施することを条件に、ホワイトリストに掲載できる種であると考えられる。

※1参考図書： カラーアトラス エキゾチックアニマル鳥類編 第2版
 なお、本書の情報については、鳥類の専門家(小嶋獣医師)から情報が古い又は適切ではない表記があるとの指摘を受けている。
 ※2参考文献： 国立健康危機管理研究機構 感染症情報提供サイト「オウム病」
<https://id-info.jihs.go.jp/infectious-diseases/psittacosis/detail/index.html>

ボタンインコ類

※コザクラインコを除く。 ※飼育実績なし・参考資料として作成

【分類】鳥綱インコ目インコ科ボタンインコ属

形態・生態情報※1	
分類	カルカヤインコ、ルリゴシボタンインコ、ボタンインコ、クロボタンインコ、キエリボタンインコ、コバナインコ、コザクラインコ、ワカクサイインコ、ハツハナインコの9種の基亜種に分類される。 主な飼鳥はルリゴシボタンインコとキエリボタンインコであるが雑種化が進み純粋な原種は減少している。コザクラインコは固有の特徴を持つ。
原産地	熱帯のサバンナに棲息している。
大きさ	【体長】 13cm 【体重】 35～50g
行動圏・習性	数十羽の群れを作る。
寿命・繁殖	【寿命】 10～12年 【繁殖】 発情期間：周年。性成熟：6～12か月。繁殖回数：3～4回。 産卵数：1日おきに4～6個。巣立ち：35～40日。
食性	【穀食性】 植物の種子。果実も食す。



(引用) <https://www.photo-ac.com/>

飼育に関する情報※1	
社会的ニーズ	
特性・飼育方法	<ul style="list-style-type: none"> ・強固な嘴で咬む個体が多い。陽気で意思表示が明確であり、神経質で性格がきつい。ボタンインコ属は攻撃性が強いので、他種鳥類との同居は避ける。 ・普段はケージ内で飼育しながら、部屋の中で自由に放鳥する方法が推奨されている。 ・適度な飼育温度は25～30度。最低20度以上。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	飼育登録0羽。条例登録実績もなし。 飼育世帯0世帯 過去の調査による飼育実績または飼育意向あり。
飼育環境	—

※1参考図書：カラーアトラス エキゾチックアニマル鳥類編 第2版
なお、本図書の情報については、鳥類の専門家(小嶋獣医師)から情報が古い又は適切ではない表記があるとの指摘を受けている。

※2参考文献：国立健康危機管理研究機構 感染症情報提供サイト「オウム病」
<https://id-info.jihs.go.jp/infectious-diseases/psittacosis/detail/index.html>

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	○	熱帯地域に棲息する種だが、小笠原に定着する可能性は他のインコ目の種と比べて高くない。 原産地以外の野外における定着事例は確認されていない。 一般的に鳥類は大量逸出しなければ野外定着リスクが低い。
在来動物の捕食・競合	○	穀物食のため在来動物を捕食するリスクは低い。
在来植物の食害・植生改変	△	穀物食のため植生改変のリスクはある。
感染症媒介	○	インコ目に多いウイルス性疾患は種特異性が強く野鳥への伝播リスクが低い。 保有可能性は低いが、鳥マラリア、鳥ポックス、サルモネラ・ティフィムリウムは注意が必要。 一般細菌類は環境からの感染であり、飼育鳥が感染源とならない。 人獣共通感染症として、オウム病があり、まれに重症化する。※2
適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	△	二重扉構造での飼育を必須にすると効果が高い。 クリッピングは換羽で復活するため定期的な処置が必要であり、また、運動不足による健康被害や事故のリスクがあり動物福祉面に課題がある。 鳥類は逸出リスクが高いうえにリスクを下げるのが難しい。
繁殖制限	△	小型の鳥類の不妊手術は可能ではあるが高リスク。 雌雄鑑別が難しく、DNA検査による結果も100%ではないため、繁殖制限をするためには1羽飼いか、各個体を別ケージで飼育することが望ましい。 偽卵への差し替えに繁殖抑制の効果はなく、産卵した卵を処分することで個体数を制御することはできるが課題が残る。
個体識別	◆	模様での個体識別は不可能。足環は健康被害のリスクあり。 現状、安全な方法はない。
感染症予防	△	島内に持ち込む前に検査を受けることにより予防が可能。ただし、ウイルス等を保有しているリスクをゼロにはできない。 鳥類の感染症リスク及び感染症予防対策は別資料のとおり。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。
総合評価		
<ul style="list-style-type: none"> □ 大量逸出しなければ野外定着・個体群形成のリスクは低く、また、個体群を形成しなければ生態系への影響リスクも低い。 □ 室内におけるケージ飼育が基本となるが、逸出リスクは高い。逸出防止には二重扉構造の設置が有効だが、設置の可否は住宅環境に左右される。逸出防止には、飼い主が逸出防止を強く意識し徹底することが必要。 □ 避妊去勢手術が困難であるため、繁殖制限の有効手段は、飼育頭数を1羽に制限することである。複数頭飼育を可能とするのであれば、頭数制限が必要である。また、雌雄が鑑別されている場合は雌雄どちらかみの飼育とする、鑑別されていないのであれば別ケージで飼育し同室に放ししないことを徹底することなどにより繁殖を制限する必要がある。 □ 感染症予防措置として、島に持ち込む前に感染症検査を実施する必要がある。 検査ではウイルス等を保有しているリスクをゼロにはできないが、感染症媒介リスクを下げるができる。ただし、インコ目であることから小笠原の在来鳥類に感染症を伝播するリスクが低いことと、事前の感染症検査の時間や費用などをふまえた実行可能性とのバランスを考慮した制度設計が必要である。 		
ホワイトリスト掲載可能性		生態系への影響リスクが低いことと逸出防止が可能であることから、感染症の事前検査、逸出防止の徹底、頭数制限などを実施することを条件に、ホワイトリストに掲載できる種であると考えられる。 ただし、これまで村内で飼育された実績がないことから慎重な判断が求められる。

オカメインコ

* 飼育実績なし・参考資料として作成

【分類】鳥綱インコ目オウム科オカメインコ属

形態・生態情報※	
分類	インコという名がついているがオウムの仲間。
原産地	オーストラリアの内陸地域のサバンナや半砂漠地帯に棲息する。
大きさ	【体長】33~40cm 【体重】80~90g オウム科の中では最小。
行動圏・習性	番または数羽の群れをつくる。
寿命・繁殖	【寿命】10~15年 【繁殖】発情期間：周年。性成熟：6~9か月。繁殖回数：1~2回。 産卵数：1日おきに4~7個。巣立ち：35~45日。
食性	【穀食性】植物の種子



(引用) <https://www.photo-ac.com/>

飼育に関する情報※	
社会的ニーズ	・日本で飼われている鳥類の7~9割はセキセイインコ・オカメインコ・ブンチョウ・コザクラインコ。
特性・飼育方法	・穏和だがやや神経質で大きい物音に敏感に反応し、パニックを起こすことがある。人に慣れ、飼育者には絶対的な信頼を寄せる傾向がある。 ・ケージの最小限の大きさは奥行き51×幅51×高さ61cm。普段はケージ内で飼育しながら、部屋の中で自由に放鳥する方法が推奨されている。 ・適度な飼育温度は25~30度。最低20度以上。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	飼育登録0羽。 飼育世帯0世帯。 条例登録実績もなし。過去の調査による飼育意向あり。
飼育環境	—

※1参考図書：カラーアトラス エキゾチックアニマル鳥類編 第2版
なお、本図書の情報については、鳥類の専門家(小嶋獣医師)から情報が古い又は適切ではない表記があるとの指摘を受けている。
※2参考文献：国立健康危機管理研究機構 感染症情報提供サイト「オウム病」
<https://id-info.jihs.go.jp/infectious-diseases/psittacosis/detail/index.html>

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	○	砂漠種であり、父島・母島では野外定着リスクは低いと考えられる。原産地以外の野外における定着事例は確認されていない。一般的に鳥類は大量逸出しなければ野外定着リスクが低い。
在来動物の捕食・競合	○	穀食性のため在来動物を捕食するリスクは低い。
在来植物の食害・植生改変	△	穀物食のため植生改変のリスクはある。
感染症媒介	○	インコ目に多いウィルス性疾患は種特異性が強く野鳥への伝播リスクが低い。保有可能性は低いが、鳥マラリア、鳥ボックス、サルモネラ・ティフィムリウムは注意が必要。 一般細菌類は環境からの感染であり、飼育鳥が感染源とならない。人獣共通感染症として、オウム病があり、まれに重症化する。※2

適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	△	二重扉構造での飼育を必須にすると効果が高い。クリッピングは換羽で復活するため定期的な処置が必要であり、また、運動不足による健康被害や事故のリスクがあり動物福祉面に課題がある。鳥類は逸出リスクが高いうえにリスクを下げるのが難しい。
繁殖制限	△	小型の鳥類の不妊手術は可能ではあるが高リスク。雌雄鑑別が難しく、DNA検査による結果も100%ではないため、繁殖制限をするためには1羽飼いか、各個体を別ケージで飼育することが望ましい。偽卵への差し替えに繁殖抑制の効果はなく、産卵した卵を処分することで個体数を制御することはできるが課題が残る。
個体識別	◆	模様での個体識別は不可能。足環は健康被害のリスクあり。現状、安全な方法はない。
感染症予防	△	島内に持ち込む前に検査を受けることにより予防が可能。ただし、ウィルス等を保有しているリスクをゼロにはできない。 鳥類の感染症リスク及び感染症予防対策は別資料のとおり。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
<ul style="list-style-type: none"> 大量逸出しなければ野外定着・個体群形成のリスクは低く、また、個体群を形成しなければ生態系への影響リスクも低い。 室内におけるケージ飼育が基本となるが、逸出リスクは高い。逸出防止には二重扉構造の設置が有効だが、設置の可否は住宅環境に左右される。逸出防止には、飼い主が逸出防止を強く意識し徹底することが必要。 避妊去勢手術が困難であるため、繁殖制限の有効手段は、飼育頭数を1羽に制限することである。複数頭飼育を可能とするのであれば、頭数制限が必要である。また、雌雄が鑑別されている場合は雌雄どちらかみの飼育とする、鑑別されていないのであれば別ケージで飼育し同室に放出しないことを徹底することなどにより繁殖を制限する必要がある。 感染症予防措置として、島に持ち込む前に感染症検査を実施する必要がある。検査ではウィルス等を保有しているリスクをゼロにはできないが、感染症媒介リスクを下げるができる。ただし、インコ目であることから小笠原在来の鳥類に感染症を伝播するリスクが低いことと、事前の感染症検査の時間や費用などをふまえた実行可能性とのバランスを考慮した制度設計が必要である。 	生態系への影響リスクが低いことと逸出防止が可能であることから、感染症の事前検査、逸出防止の徹底、頭数制限などを実施することを条件に、ホワイトリストに掲載できる種であると考えられる。ただし、これまで村内で飼育された実績がないことから慎重な判断が求められる。
ホワイトリスト掲載可能性	

ブンチョウ

【分類】鳥綱スズメ目カエデチョウ科ブンチョウ属

形態・生態情報※	
分類	原産国では「Rice Bird」と呼ばれ稲の害鳥となっていたが、現在、棲息数は減少している。
原産地	インドネシアのジャワ地方、バリ島の草原や低木林に棲息する。人家に近い林や耕地でもみられる。
大きさ	体長:約14cm 体重:22~27g オスはメスよりも体がやや大きく、嘴やアイリングの色も濃い。
行動圏・習性	—
寿命・繁殖	【寿命】8~12年 【繁殖】発情期間:9~6月。性成熟:7~8か月。繁殖回数:1回。 産卵数:1日おきに5~6個。巣立ち:25~30日。
食性	【雑食性】主に植物の種子。昆虫や軟体動物も食べる。



(引用)https://www.photo-ac.com/

飼育に関する情報※	
社会的ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> 日本で飼われている鳥類の7~9割はセキセイインコ・オカメインコ・ブンチョウ・コザクラインコ。 江戸時代に中国から日本に輸入され繁殖が行われて、今ではフィンチの中でも育てやすく慣れやすい飼鳥として流通している。
特性・飼育方法	<ul style="list-style-type: none"> オスは性格がやや荒く、闘争することも多い。縄張り意識が強いいため、幼鳥から複数飼育しないと同居は難しいため、単独飼育か仲のよい番での飼育が理想。 ケージの最小限の大きさは奥行き46×幅76×高さ46cm。普段はケージ内で飼育しながら、部屋の中で自由に放鳥する方法が推奨されている。 適度な飼育温度は25~30度。最低20度以上。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	
飼育環境	

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	△	熱帯に棲息する種で、ハワイなど温暖な地域での野外定着事例があり、小笠原原においても定着する可能性が高い。アメリカでは飼育自体を規制している地域もある。一般的に鳥類は大量逸出しなければ個体群形成リスクが低い。
在来動物の捕食・競合	△	雑食性のため在来生物の捕食リスクがあるが、種子食性が高い。スズメ目で、在来鳥類(オガサワラカワラヒワ、メグロ、オガサワラヒヨドリ、ハシナガウグイス等)と近縁のため餌場の競合等のリスクがあるが、一般的に鳥類では餌の競合がでにくい。
在来植物の食害・植生改変	△	雑食性のため植生改変のリスクはある。
感染症媒介	◆	フィンチ類は、国内飼育種でのウイルス保有調査がほとんど行われておらず情報不足であり、未知の病原体のリスクがオウム類に比べて高い。特に鳥マラリア、鳥ポックス、サルモネラ・ティフィムリウムは注意が必要。小笠原には在来のスズメ目が複数生息しているため、感染症媒介リスクが非常に高い。

適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	△	二重扉構造での飼育を必須にすると効果が高い。クリッピングは換羽で復活するため定期的な処置が必要であり、また、運動不足による健康被害や事故のリスクがあるため動物福祉面に課題がある。鳥類は逸出リスクが高いうえにリスクを下げるのが難しい。
繁殖制限	△	小型の鳥類の不妊手術は可能ではあるが高リスク。雌雄鑑別は難しい。雌雄鑑別は、DNA検査による結果も100%ではないため、繁殖制限をするためには1羽飼いか、各個体を別ケージで飼育することが望ましい。偽卵への差し替えに繁殖抑制の効果はなく、産卵した卵を処分することで個体数を制御することはできるが課題が残る。
個体識別	◆	模様での個体識別は不可能。足環は健康被害のリスクあり。現状、安全な方法はない。
感染症予防	△	島内に持ち込む前に検査を受けることにより予防が可能。ただし、ウイルス等を保有しているリスクをゼロにはできない。 鳥類の感染症リスク及び感染症予防対策に関しては別紙資料のとおり。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
<ul style="list-style-type: none"> 国際的に逸出、野外定着が問題視されている種であり、野外定着リスクは高い。 大量逸出しなければ野外定着・個体群形成のリスクは低く、また、個体群を形成しなければ生態系への影響も低い。 室内におけるケージでの飼育が基本となるが、逸出リスクは高い。逸出防止には二重扉構造の設置が有効だが、設置の可否は住宅環境に左右される。逸出防止には、飼い主が逸出防止を強く意識し徹底することが必要である。 避妊去勢手術が困難であるため、繁殖制限の有効手段は、飼育頭数を1羽に制限することである。複数頭飼育を可能とするのであれば、頭数制限が必要である。また、雌雄が鑑別されている場合は雌雄どちらかのみ飼育とする、鑑別されていないのであれば別ケージで飼育し同室に放出しないことを徹底することなどにより繁殖を制限する必要がある。 感染症予防措置として、島に持ち込む前に感染症検査を実施するなどの対策が必要である。検査ではウイルス等を保有しているリスクをゼロにはできないが、感染症媒介リスクを下げることはできる。しかし、ブンチョウは、感染症に関して調査が行われていないことから未知の病原体のリスクが高い。また、スズメ目であることから、在来鳥類への感染症媒介リスクが非常に高いことに注意が必要である。 	
ホワイトリスト掲載可能性	感染症媒介リスクが高く、飼育にあたっては特に注意が必要な種である。感染症の事前検査、逸出防止の徹底、頭数制限などを実施することを条件としたうえで、ホワイトリスト掲載にあたっては慎重な判断が求められる。

ニワトリ (ウコッケイを含む)

【分類】鳥綱キジ目キジ科ニワトリ属

形態・生態情報※	
分類	鳥綱キジ目キジ科ニワトリ属
原産地	野生種とされている赤色野鶏は現在インドから東南アジアに生息。
大きさ・特徴	オス2.9kg、メス2.2kg 頭部に肉冠(トサカ)がある。
行動圏・習性	大きな声で鳴くのは雄だけ。
寿命・繁殖	孵卵期間：21日
食性	【雑食性】 穀類、糖類、動物性たんぱく質、緑餌、ミネラル。



(引用) <https://www.photo-ac.com/>

飼育に関する情報※	
社会的ニーズ	ニワトリの主要な祖先である赤色野鶏は5000年前に家畜化されたと考えられており、現存する野生種と家畜や愛玩用として改良された数多くの品種がある。
特性・飼育方法	屋外の飼育舎でコンクリートや土間の床で飼育されることが一般的。暑さに弱く、寒さに強い。基本的に多湿状態は苦手。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	
飼育環境	

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・ 個体群形成	◆	国外で多くの野外定着の事例がある。ハワイ諸島でも事例あり。各地で野生化したニワトリの管理策が講じられている。 一般的に鳥類は大量逸出しなければ野外定着リスクが低いが、サイズが大きいことから小型の鳥類と比べ野外定着リスクは高い。
在来動物の捕食・ 競合	◆	雑食性のため在来動物を捕食する可能性がある。小型動物や昆虫を捕食し、在来の鳥類・爬虫類など野生生物と餌資源や生息場所を競合する恐れがある。 地表性土壌動物、トカゲや昆虫への捕食の影響リスクが高い。 サイズが大きいことから小型の鳥類と比べ影響が大きい。
在来植物の食害・ 植生改変	◆	植物の食害、植生改変の事例あり。 サイズが大きいことから小型の鳥類と比べ影響が大きい。
感染症媒介	◆	鳥インフルエンザ等の家畜伝染病や寄生虫の媒介者となり得る。 野生化したニワトリが在来鳥類に影響を与える疾病を広める恐れが指摘されている。キジ目は感染症リスクが高いとされる。

適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	△	二重扉構造での飼育を必須にすると効果が高いが、基本的に屋外において鶏小屋などで飼育されている。 鳥類は逸出リスクが高いうえにリスクを下げるのが難しい。
繁殖制限	—	去勢手術は可能。畜産では肉質改善などを目的として行われることがある。 幼体の性別は一般人には見分けの難しい。
個体識別	○	マイクロチップの装着が可能。 足環も健康被害のリスクはあるが装着可能。
感染症予防	△	島内に持ち込む前に検査を受けることにより予防が可能だが、屋外飼育の場合には持ち込まれたあとのリスクは高いと考えられる。 鳥類の感染症リスク及び感染症予防対策に関しては別紙資料のとおり。
獣医師による治療・ 指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
ホワイトリスト掲載可能性	<ul style="list-style-type: none"> 野外定着事例が多く、小笠原でもかつて野外定着していた事例があり、野外定着リスクが非常に高い。個体群を形成した場合には、在来動物との競合や植生改変等の影響リスクも高い。また、感染症や寄生虫の媒介者となるリスクも高い。 室内飼育も可能ではあるが、一般的には屋外飼育となっている。屋外飼育で逸出を防止するためには、飼育小屋のような囲われた施設で飼育し放出しないことを徹底する必要がある。 オスは去勢するか雌雄どちらかのみの飼育により、繁殖制限は可能である。マイクロチップ装着による個体識別も可能である。 感染症予防措置として、島に持ち込む前に感染症検査を実施するなどの対策が必要である。ただし、屋外飼育の場合では島に持ち込まれたあとに野鳥と接触する可能性があり、特にキジ目は感染症リスクが高い。 産業動物として指導、管理すべきである。 <p>生態系への影響リスクが高く、飼育にあたっては特に注意が必要な種である。感染症の事前検査と室内飼育を徹底することにより生態系への影響リスクは低減できるが、ペットではなく産業動物として管理することが望まれる種であり、ホワイトリスト掲載には適さないと考えられる。</p>

※参考図書：日本獣医師会 学校飼育動物の診療ハンドブック

ヒメウズラ

【分類】鳥綱キジ亜目キジ科シンオイカス属

形態・生態情報※	
分類	キジ目キジ科ウズラ属に分類されるウズラとは別の種。国内で流通しているヒメウズラは野生種がない。
原産地	東南アジア、オーストラリアの茂みや農耕地などの草地に棲息する。
大きさ	体長：7～14cm 体重：28～40g。ウズラは90～160g。
行動圏・習性	地上生活性。高さ2～3m、距離10m程度の飛行が可能。一夫一妻制をとり、番で行動する。
寿命・繁殖	【寿命】5年程度 【繁殖】野生では年に1～2回。飼育下では年に複数回繁殖する。妊娠期間16日。1回につき1～2羽。国内で流通しているヒメウズラは抱卵することが少なく、孵化には孵化器を使う必要がある。
食性	【雑食性】昆虫類や穀類を食べる。



(引用) <https://www.photo-ac.com/>

飼育に関する情報※	
社会的ニーズ	ペットとして飼育されはじめたのは、19世紀後半に欧米で観賞鳥としての人気が高まったのがきっかけといわれる。
特性・飼育方法	一夫一妻制だが、多頭飼育は可能。ケージ、水槽、衣装ケースなどで飼育できる。小さいのでケージの柵の間から抜け出ないように気をつける。鳴き声はウズラと比べて小さい。雛の時点からうまく人馴れさせると非常によく懐く。
島内での飼育状況	
飼育登録数等	
飼育環境	

生態系への影響リスク ◆(リスクが高い)・△(リスク中程度)・○(リスクが低い)・—(情報不足)		
野外定着・個体群形成	△	ヒメウズラやコジュケイの仲間は場所を選ばず野生化しやすい。原産地以外の野外における定着事例は確認されていない。一般的に鳥類は大量逸出しなければ野外定着リスクが低い。
在来動物の捕食・競合	△	昆虫を食べるので在来種を捕食する可能性がある。
在来植物の食害・植生改変	△	植物を食べるので食害の可能性はある。
感染症媒介	◆	ヒメウズラは感染症検査のスクリーニング体制が整っていないため情報不足であり、未知の病原体のリスクが高い。キジ目は感染症リスクが高いとされる。

適正飼養の可能性 ◆(適正飼養が不可能)・△(適正飼養が困難または条件がつく)・○(適正飼養が可能)・—(情報不足)		
逸出防止	○	二重扉構造での飼育を必須にすると効果が高い。クリッピングは換羽で復活するため定期的な処置が必要であり、また、運動不足による健康被害や事故のリスクがあるため動物福祉面に課題がある。鳥類は逸出リスクが高いうえにリスクを下げるのが難しい。
繁殖制限	△	小型の鳥類の不妊手術は可能ではあるが高リスク。雌雄鑑別は難しい。雌雄鑑別は、DNA検査による結果も100%ではないため、繁殖制限をするためには1羽飼いか、各個体を別ケージで飼育することが望ましい。偽卵への差し替えに繁殖抑制の効果はなく、産卵した卵を処分することで個体数を制御することはできるが課題が残る。
個体識別	◆	模様での個体識別は不可能。足環は健康被害のリスクあり。現状、安全な方法はない。
感染症予防	△	島内に持ち込む前に検査を受けることにより予防が可能。 鳥類の感染症リスク及び感染症予防対策に関しては別紙資料のとおり。
獣医師による治療・指導	△	専門的な知識、技術を要する。

総合評価	
<ul style="list-style-type: none"> 産業動物としてのウズラとは異なる属、種であり、ヒメウズラを扱った文献も少なく情報が不足している。 大量逸出しなければ野外定着・個体群形成のリスクは低く、また、個体群を形成しなければ生態系への影響リスクも低い。 室内におけるケージまたは水槽や衣装ケースでの飼育が基本となる。地上生活性で飛翔能力も低いいため、逸出するリスクは低い。逸出防止には二重扉構造の設置が有効だが、設置可否は住宅環境に左右される。逸出防止には、飼い主が逸出防止を強く意識し徹底することが必要。 避妊去勢手術は困難であるため、繁殖制限の有効手段は、飼育頭数を1羽に制限することである。複数頭飼育を可能とするのであれば、頭数制限が必要である。また、雌雄が鑑別されている場合は雌雄どちらかのみを飼育とする、鑑別されていないのであれば別ケージで飼育し同室に放出しないことを徹底することなどにより繁殖を制限する必要がある。 感染症予防措置として、島に持ち込む前に感染症検査を実施するなどの対策が必要である。検査ではウイルス等を保有しているリスクをゼロにはできないが、感染症媒介リスクを下げることはできる。ただし、ヒメウズラは、ウイルス保有について情報が不足しており、未知の病原体のリスクが高い。また、キジ目であることから感染症リスクは高い。 	
ホワイトリスト掲載可能性	感染症媒介リスクが高く、飼育にあたっては特に注意が必要な種である。感染症の事前検査、逸出防止の徹底、頭数制限などを実施することを条件としたうえで、ホワイトリスト掲載にあたっては慎重な判断が求められる。

鳥類に関する感染症リスク及び感染症対策について

【ヒアリング対象】

- ・国立健康危機管理研究機構国立感染症研究所昆虫医科学部 犬丸瑞枝氏
- ・岩手大学獣医学部共同獣医学科獣医寄生虫学研究室 佐藤雪太氏

1 鳥類の持ち込みに関する感染症リスクについて

鳥類のホワイトリスト検討にあたって専門家ヒアリングを行ったところ、主な意見として、「鳥類の持ち込みに関して最も懸念されることは、ペットの鳥が感染症を媒介し、野生の鳥類に感染し蔓延することである。」ということであった。

感染症は、一度侵入してしまうと完全な排除が困難であり、また島嶼の生態系では感染症が侵入した場合に在来種に大きな影響を及ぼす可能性が高いことが知られており、ニュージーランドやハワイでは、飼育鳥を持ち込む際に健康診断や感染症検査を行うなどの対策がとられている。

そのため、感染症対策として、鳥類を島に持ち込む前のスクリーニング(一次的なふるい分け)検査の実施について検討する必要がある。

上記のことを受け、引き続き専門家へのヒアリングなどを通して、感染リスクの高い感染症、スクリーニング検査の方法や意義、実行可能性などを整理する。

2 小笠原諸島の在来鳥類について

小笠原諸島には、次のような固有種を含む貴重な鳥類が生息している。

- ・ オガサワラカワラヒワ (スズメ目アトリ科)
- ・ ハハジマメグロ (スズメ目メグロ科)
- ・ ハシナガウグイス (スズメ目ウグイス科)
- ・ アカガシラカラスバト (ハト目ハト科)
- ・ オガサワラノスリ (タカ目タカ科)
- ・ オガサワラヒメミズナギドリ (ミズナギドリ目ミズナギドリ科) など

3 特に注意が必要な感染症

次の感染症は、様々な鳥種に感染する可能性があり、特に注意が必要な感染症である。

いずれもPCR検査や培養検査によるスクリーニングが可能。

- ・ 鳥マラリア (蚊が媒介する原虫感染症)
- ・ 鳥ポックス (ウイルス性感染症)
- ・ サルモネラ (細菌感染症)
- ・ オウム病 (クラミジアによる細菌感染症)

4 優先度が比較的低い感染症

次の病気は、種特異性が高いなど野生鳥類へのリスクは比較的低い。

- ・ PBF D（オウム類嘴羽毛病、ウイルス性感染症）
- ・ BFD（ポリオーマウイルス属による感染症）

この2種は、インコ目への種特異性が高くスズメ目など他の鳥類への感染例はほとんど確認されていない。

- ・ MRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）

MRSAは、家禽やカモ類での感染が主であり、ペットのオウム類での報告はほとんどない。

- ・ 鳥インフルエンザ

鳥インフルエンザは、近年、様々な動物から確認されているが、鳥類においては主に野生のカモ類などが感染源とされており、ペットの小型鳥類が感染源となる可能性は極めて低い。

5 スクリーニング検査の方法

検査は、一般的に次の流れで行われる。

- ① 動物病院で検体を採取（血液、口や排泄口のぬぐい液、糞など）

↓

- ② 検体を大学・研究機関・民間検査会社などへ送付

↓

- ③ PCR 検査*注や培養検査で感染症の有無を確認

（※）ポリメラーゼ連鎖反応(Polymerase Chain Reaction)の略で、ウイルス等の遺伝子を増幅させて検出する技術。

6 スクリーニング検査にかかる時間と費用

【検査にかかる時間】 数日～1週間程度。場合によっては1～2週間。

【検査にかかる費用】 検査機関によって異なるが、大学で検査を行う場合は、PCR 検査1項目あたり数千円程度の場合が多いとされる。

【その他の留意点】 PCR 検査でも感染を見逃す可能性(偽陰性)がある。

偽陰性などの観点から、1～3週間ほどあけて2回の検査が推奨される。

ペットホテルやショップに預ける際、施設側がPBF D、BFD、オウム病のPCR 検査を要件としていることもあるくらいに病原体検査自体は一般的。

7 飼育鳥から野生の鳥への感染リスク

多くの鳥類の感染症は、「特定の種類の鳥にしか感染しない性質(宿主特異性)」がある。

そのため、オウムやインコなどの飼育鳥から、スズメ目など他の種の野生鳥に直接感染が広がる可能性は、一般的には高くないと考えられる。

ただし、鳥マラリアやサルモネラなどは宿主範囲が広く、複数の分類群の鳥類に感染する可能性があり注意が必要である。

鳥マラリアは、島嶼生態系に特に大きな影響を与える感染症として知られており、ハワイでは外来鳥類と蚊の持ち込みにより固有の鳥類が絶滅した事例がある。

また、スズメ目での事例になるが、これまで宿主特異性が比較的高いと考えられていたが、鳥マラリア原虫種が大きく離れた分類群の鳥種に感染する事例も増えており、インコ目からスズメ目への感染リスクも否定できない。

サルモネラでは、北海道でスズメの大量死が発生した事例がある。ただし、主な感染経路は糞便や汚染された餌や水であり、飼育鳥と野生鳥類の接触が限定的である場合の感染リスクは比較的低い。

8 飼育鳥から野生鳥類への感染経路

感染は次のような経路で広がる可能性がある。これらの経路は、屋内飼育や逸出防止により感染機会を抑制できる。

- ・ 飼育鳥が逃亡や放鳥により野生化する
- ・ 飼育鳥の糞便による環境の汚染
- ・ 蚊などの昆虫による媒介
- ・ 飼育施設周辺での野鳥との接触

9 感染症以外に確認した方がよいもの

感染症だけでなく、外部寄生虫の確認や事前の健康診断を実施することが望ましいとされる。

感染症検査と同じタイミングで実施可能。

駆除不能な病原体が検出された場合は、駆除が完了するまで持ち込みを不可とするべき。

マダニ類は様々な野生動物に寄生し、病原体を媒介する。インコ目での寄生は少ない。

コザクラインコではクリプトスポリジウムという寄生虫がいる懸念があり、これは駆除方法がない。

10 インコ目に対する感染症検査の必要性について

宿主特異性の観点からインコ目の感染症が直接野生鳥類に影響を与える可能性は比較的低い。

鳥マラリアなどにおいても、飼育管理が行われた場合には、リスクが一定程度低減すると考えられる。

一方で、感染症は、一度侵入してしまうと完全な排除が困難であり、また島嶼の生態系では感染症が侵入した場合に在来種に大きな影響を及ぼす可能性が高く、インコ目であっても慎重な管理が求められる。

インコ目に対しても、持ち込み前に一般的な健康診断の実施と感染症のスクリーニング検査を行うことは、野生鳥類の保全及び感染リスクの観点から一定の意義があると考えられる。

11 検査制度の導入について

検査制度を導入する場合には、上記のことに留意し、感染リスクと実行可能性のバランスを考えて制度を設計する必要がある。

哺乳類・鳥類のホワイトリスト先行施行について

(令和7年度第1回ペット条例審議会での堀越会長意見)

- ◆ 条文が施行されないと、持ち込まれるペットが増えてくるわけである。
- ◆ 哺乳類と鳥類に関してのみホワイトリストを適用させるなど、部分的な施行はできないか。



(事務局としての考え)

- ➔ 条例の技術的には可能と思われる。
条例もしくは施行規則に「哺乳類に関する規定は令和〇年〇月〇日から施行する。」と規定。
- ➔ 一方で以下の点を懸念する。
 - ◆ 施行にあたっては十分な周知期間が必要であるが、哺乳類・鳥類など順次施行となると、条例としては複雑になり、村民にとっても制度内容がわかりにくく混乱する可能性がある。
 - ◆ これから運用する持込み申告が浸透した上で検討する想定 of 持込み制限の運用方法が十分に検討されていないため、無用なトラブルを招く恐れがある。
 - ◆ 生態系に対しよりリスクが高いと考えられる爬虫類や昆虫類の検討過程において、規制の考え方や基準が見直される可能性もあることから、全ての対象動物種の検討を終えた上で条例改正を行うことが望ましい。



以上を踏まえ、種ごとに順次施行していくことは、慎重な検討が必要である。